

金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和四年四月一日発行 第九十七号

檀信徒の皆さまこんにちは。一気に春がやってきました。昨年、裏山に植えた高野槇の葉が枯れた様に茶色でしたが、日増しに緑が蘇ってきてます。高野槇はなかなか定植するのが難しく、以前は本堂を落慶した時に記念樹として植え、立派に成長をしていたのですが、根の張りが弱いために台風で倒れてしまいました。ただ、枝を切って仏花としてお供えすると、冬であれば二、三ヶ月は持ちます。十年後、二十年後、次の世代の住職たちにお供えしてもらえればとの思いからサカキと合わせて植樹をしました。まだ喜んで報告をするには気が早いのですが、我慢できずに書いてしまいました。もちろん水やりをする時には「ありがとう！」の言葉を口に出して伝えています。私にとっては小さな楽しみ、大きな喜びです。

毎月二十一日は真言宗の寺院や僧侶にとって特別な日です。特に三月二十一日は正御影供（しょうみえく）と言ってお大師様が高野山の奥之院に御入定された日に当たり、全国のお寺で様々な行事が行われています。当山では旧暦の三月二十一日に長年お接待を出してきましたが、新型コロナウイルスが蔓延しからはお休みとしております。今年も残念ながら出来そうにありません。しかしながら

朝のお勤めでは報恩謝徳の念をもつてお勤めをさせて頂きます。

四月二十一日（旧三月二十一日）

お接待 中止

高野山では年間に定例のご供養まで合わせると二百近い法要が営まれているようですが、全国の末寺を挙げて行われる大法要が三つあります。それはお大師様のお誕生を祝う御誕生会、高野山が開かれた記念の開創法会、お大師様が奥之院にご入定された御恩忌です。この三つの法要が五十年ごとに行われます。

私も平成二十七年にお檀家様と団体参拝で高野山開創法会に参拝をしてまいりました。道中、観心寺さまの参拝や丹生都姫神社で火渡りをしてから高野山に上がり、奥之院では檀信徒の皆さまが寄進して建立した灯籠を見ることもできました。高野山での二日目はメインの結縁灌頂がありました。結縁灌頂とは一言で言うと、仏様との仏縁を結び自身の仏心に目覚めるための法要です。詳細は書けませんが、蠟燭の灯ひとつ、真つ暗闇の中、緋衣を着た大阿闍梨さまから有難い法話を頂いた後に、灌頂の儀式がおこなわれます。それぞれが曼陀羅の上に降花した仏様とご縁を結び、暗闇の部屋から明るい廊下へと出て来られる一時間以上の儀式です。どなたも大変清々しい、初々しささえ感じられる穏やかなお顔で道場から出て来られました。その時、私は忘

れられない光景を目にしました。年は三十代くらいの若い男性がお大師様の掛け軸の前で三礼を始めたのです。膝と手と額を床につけての三礼です。当然のごとく行われたその作法は、人目もはばからず、ごく自然に行われ、過ぎ去っていききました。私は仏様への帰依、篤信を教えられたのを昨日のこのように憶えています。その日の夜は、有馬温泉で九州から参拝に来た檀信徒、約七百名そろっての懇親会でした。私もお檀家様とお酒などを交わしながら、高野山での感想などを伺うと、多くの方は結縁灌頂が大変心に残ったとお話でした。中でも数名の方は儀式の後に涙が止まらず、人前に出てくるのには、はばかりほど泣けてきたそうです。私自身も住職になって初めての大法要でしたので色々と思案をしましたが、盛会に終わることが出来感動的でした。来年の五月には千二百五十年のお誕生会がありますので、皆さんと高野山へ参拝に行きたいと思っています。

五月八日（日曜日）十四時より

「法話の会」金剛宝戒寺 本堂において

号泣されたお檀家様は知らないことですが、その時の法縁は胎蔵界の結縁灌頂でした。胎蔵界大日如来は当山のご本尊様でもあります。その様な事もあって涙されたのではないだろうかと気づいたのはお寺に帰ってからでした。ご縁とは有り難いものです。

合掌